

# どくだみの雫を、人生の友に！

どくだみの雫は、健康飲料です。どくだみの生葉を、すりつぶし搾ったビン詰め青汁です。製造元は、山梨県勝沼町にある創業明治10年のシャトー勝沼。勝沼は、甲州きっての葡萄の名産地。葡萄ワインの生産量は日本一、葡萄作り1200年、ワイン作り120年の歴史があります。その勝沼のワイン作りの歴史中、地元屈指のワイナリーのシャトー勝沼が、どくだみの雫を作っています。

ある日、どくだみの雫の愛飲者の方が、どくだみの雫を子供に飲ませ、皮膚にも付けてみました。どくだみの匂いを子供は、嫌がりましたが説得する為にその子の親も一緒に朝晩飲みました。すると、飲み始め付け始めてから4ヶ月目に効果が見えてきました。ガチガチで象の肌のような皮膚がやわらかくなり、カサブタがとれた後にきれいなピンク色の皮膚が見えたのです。かゆみも止まりました。自分自身も、気苦勞で病んでいた胃潰瘍が、うそのように消えてしまいました。

どくだみは、日本で古来から使用してきた薬草です。原材料には、問題の無い商品で歴史の古い民間薬でもあります。ドクダミ科に属する多年草で、元来、生命力旺盛な植物です。民間薬とは、庶民の知恵と経験から生まれ、庶民の間で代々伝えられてきた経験薬とも言われています。江戸時代以前には「しぶき」と呼ばれて、一度根をおろすと根絶出来ないほどの、しぶとい草と言う意味もあったようです。また、現在「日本薬局方」に収録されているどくだみの生薬名は「十薬」となっています。

生薬というのは、自然の動植物や鉱物を原料とし、これを乾燥させたもの、皮をはぐ、粉末にするなどの方法で製品化した薬のことです。「十薬」の名の由来は、「十の薬効がある」「十の毒を消す」「たくさんの効果があるため、薬が重なった（重薬）ようだ」など様々です。

『どくだみの雫』は食品上、清涼飲料水です。清涼飲料水ですが『日本薬局方』には十薬として収録されているほどの生薬で、民間薬として使用されてきた経緯があり、医薬品指定にはなっていないので、薬局でなくても販売はできますが、清涼飲料水としての分類になります。

どくだみといえば、独特のにおいが強烈です。しかし、この強烈なおいのもと（主にデカノイルアセトアルデヒド）が強い抗菌性をもっています。つまり、においがあるからブドウ球菌や糸状菌に対して強い生菌力があり、おできやタムシ、水虫に効果を発揮します。どくだみの生の葉を乾燥させると、この強烈なおいには消えますが同時に強い制菌力も失ってしまいます。

「どくだみ」の主成分は、デカノイルアセトアルデヒドのほか、ケルシトリンやイソケルシトリンといった物質とカリウムなどのミネラルもあります。

生薬の青汁には、葉緑素（クロロフィル）が含まれます。これらの成分は、尿の出をよくし、便通をつけて、体内に溜まった老廃物を排出する作用があり、また、ルチンと同じように毛細血管を丈夫にし、高血圧症の要因となる血液中の塩分を排除して、血液をきれいにする作用もあります。話題の「血液サラサラ系」の飲料品として、最適な「どくだみの雫」です。要するに、どくだみは抗菌力が強く、血液をきれいにし、血液循環をよくすることで、人間が本来もっている自然治癒力を高める最適な野草ということです。

現在販売されている健康食品のほとんどは、なにか不足分を補うプラス物が多いのですが、その点、どくだみは、毒素を排出させ、自然治癒力を高めるマイナス物といえます。アトピーや花粉症などのアレルギーは免疫力の低下によって起こることが多く、人間が本来持っている免疫力や自然治癒力は、動物としての人間が自然界の雑菌や植物と共存するための生きる力であり、本来持ち合わせている生活力でもあります。

どくだみは民間薬や生薬として、人間の基本的生活力を引き出すパワーを持っています。それが十薬（重薬）と言われるゆえんでもあります。